

六十年前の傷跡

(平成十七年度戦没者追悼式中学生平和祈念作文より)
北牟婁郡紀北町立紀北中学校三年(当時) 服部 峰祥

沖縄の平和学習から三カ月が経ちました。戦争という言葉からは、過去の出来事としか思っていなかった僕ですが、六十年も経った今なお、人々の心の中に大きな傷として残っていることを知りました。

沖縄の平和学習では、鍾乳洞を利用した巨大な防空壕に入りました。壕のことは、事前に学習していたのですが、実際に入ってみると、想像を絶するすごさにびっくりしました。また、地元の話り部の方のお話や、明かり一つない本当の「闇」に、戦争の悲惨さを改めて強く感じました。

そんな不幸しか与えないような戦争で、紀伊長島町(現紀北町)でも悲しいことですが、約五百人の命が奪われています。町の墓地にある「無名勇士之墓」(P20〜21参照)について、五十八年ぶりに、埋葬された二人の身元が判った話を聞きました。二人とも二十一、二歳の若さで亡くなっていて、その名前すらこれまで判らなかつたなんて…とても寂しい気持ちでいっぱいになります。

僕のおじいちゃんは、広島生まれです。僕よりも幼い頃に、両親を原爆によって亡くしています。おじいちゃんは疎開していて助かったのですが、



それからの両親のいないおじいちゃんの生活を思うと、僕にはとても想像できません。おじいちゃんは戦争の話を、涙を流しながら話してくれました。

おばあちゃんの二人のお兄さんも、戦死しています。一番上のお兄さんは、陸軍に入隊していて、二十三歳の時にビルマ方面(現ミャンマー)で亡くなっています。外国に戦争に行き、生まれ故郷の紀伊長島に帰ってきたのは、同じ隊にいた方が持ち帰ってくれた土地だけだったそうです。次のお兄さんは、中学校を卒業した後、自分から海軍に

志願して入隊しました。今の僕と同じ年齢の頃だったそうです。そして、終戦の一カ月程前に、山口県の岩国という所で、空襲により亡くなりました。十八歳だったと聞きました。

やりたいこと、夢など、色々あったと思います。戦争は、そのような人の夢、命さえも奪ってしまい、家族をバラバラにしてしまう。なぜ人は、悲しみだけを残すような戦いをするのでしょうか。二度とこのようなことを、起こしてはならないと思います。

現在では、イラクでの戦争や、毎日のように報道されている自爆テロなど、世界中でたくさんの方が亡くなっています。

地球上の動物の中で、このような戦いをするのは「人間」しかいません。また、それを止められるのも、「人間」しかないのです。

世界のすべての人が幸せになるために、僕達が次の世代に戦争の悲惨さ、みにくさを伝えて、二度と戦争を起こさないように、何かをしなければいけないのです。それが何かは、まだはっきりと分かっていませんが、それが僕達の務めだと思っています。

世界中が平和になることを、心から願っています。

戦争と平和を語り継ぐ

～子どもたちからのメッセージ～

幸せをふみにじる戦争

(平成十八年度戦没者追悼式中学生広島訪問作文より)
三重郡菟野町立八風中学校三年(当時) 松永 峻佑(りょうすけ)

僕の家は、かつての戦争で祖父の父(曾祖父)が戦死しているそうです。

今回、菟野町の「非核平和都市宣言推進事業」で、世界最初の被爆都市広島を訪ねる機会を得て、町から十人の中学生広島訪問団の一員として、広島を訪ねました。

初めて訪れた被爆都市は、六十年以上も過ぎた今もやはりすごい爪あとを残していました。

最初に向かった原爆ドーム、それは核兵器の恐怖を不生き証人でした。

爆心地の至近距離で、建物はポロポロに崩れ、壁には焦げたあとが残っていて、原爆の威力をまざまざと物語っていました。それはあまりにも衝撃的で、声も出ませんでした。

次に被爆体験者の語り部の方に、当時の様子を聞きました。

語り部さんは当時十九歳で被爆したそうです。爆風でガラスの破片が体の何か所にも刺さり、左目を失明したそうです。片目の見えない生活は自分にとって考えられないことです。何もかも苦労するだろうと思うととても怖くなりました。でも語り部さんの「片目

が見えなくても、残った片目が見える」といわれた言葉がすごく心を打って、生きる希望のこもった言葉でした。

「どんなに体が不自由でも、命を簡単に捨ててはいけない」と言われているようで、一つ一つの言葉が大変重たく感じ、被爆体験者にしか話せない生の声を聞いてよかったです。

平和祈念資料館には、被爆した大小さまざまな生活用品や町の様子が展示してあって、入館してから退出するまで、恐怖のあまり鳥肌が立ったままでした。

被爆体験者の話を聞いたあとだったので、展示物がどういうものか分かりやすく、良い学習になりました。

原爆を投下される前と後では比べ物にならず、民家が跡形もなく消えて、あたり一面焼け野原になっていたり、原爆の高熱で皮膚がドロドロに溶けた少年少女の姿には心が痛み、思わず目をそらしてしまう場面もありましたが、この悲惨な姿を自分の目に焼き付けてこそ、平和について真剣に考えることだと思いました。

原爆は何もかも消してしまう核兵器。



世界中のどの国も核兵器は絶対に使ってはけません。原爆で亡くなった人の死を無駄にせず、核兵器の恐ろしさを沢山の人が知ってほしいと思いました。

僕たちが今回、広島で見たり聞いたりしたことを一人でも多くの仲間と学んでもらう機会を広げてほしいと思います。

「平和とは何か」を考えたとき、「笑顔」と言う文字が浮かび上がってきました。

語り部さんが「お互いが心をつなぎ合わせ、友達同士助け合うことが平和だ」と言われた言葉が強く印象に残りました。国と国、人と人が助け合って笑顔があふれること、それが平和なのだと思えます。

僕たちが何げなく日常生活を過ごしている「今」が平和なのだ実感して、この平和がいつまでも続くことに努力したいと思えます。

